ゴシック期の板絵テンペラ画技法

The Gothic Tempera technique

紀井利臣
Toshiomi Kii

ゴシック期の板絵テンペラ画技法

紀井利臣
跡見学園女子大学准教授

１．美術史の流れについて

今日はお手元の資料から話します。こちらの資料は年表なります。学生に教えるときは社会学的な背景も含めながら、東西のつながりを認識し意識しながら学んでほしいと考えています。

今日のテーマは、ゴシック時代の板絵テンペラ画技法というタイトルが付いています。ですから、ゴシック時代がどんな時代であるのか、それを皆さんに見てもらうために歴史年表を用意しました。

最初の一枚にロマネスクとありますが、これ以前のビザンチン時代が工藤先生のお話された時代です。このページの黄色いイコンあたりから、西洋の絵画が始まったとされています。これ以前の絵画がモザイクです。舗床や壁画モザイクの時代が長くあったわけです。下の方にロマネスクとあります。ロマネスクの言葉の意味は割愛させていただきます。

二枚目はいろいろゴシック時代のことを載せています。当時日本では鎌倉時代にあたり、大陸の禅僧から水墨画が入ってきた時代です。三枚目はいよいよルネサンスです。ルネッサンスかルネサンスかの言葉の違いを注意します。発音など美術史的な言語は、時代と共にどんどん変化してきています。例えば僕の学生時代、ピエロ・デッラ・フランチェスカのデッラはデラでしたが、現在ではデッラなどと標記されています。

私は元々油絵科出身なので、イタリア美術のルネサンス時代をメインとして展開したいのですが、教鞭を取っている大学では、ルネサンス以前の時代も教えなければならないので、どうしても美術史を話す上で言語も避けて通れないのが事実です。ですから、何かと表記に間違いがあるかもしれませんが、これが大体の美術史の流れになります。

２．板絵テンペラ画の実物について

次に板絵テンペラ画の作品をいくつか持ってきました。私は絵を描く制作者なので、どうしても仕事のプロセスや順番を重視します。それなので最初の紹介した、初期のイコンを持ってきました。実物になります。裏にタイトル等が書かれています。濡らしたり擦ったりしなければ、あまり気にしませんので、是非観て下さい。観ていただける方がいらっしゃれば、粗大ゴミに出されるよりはいいと思いますので。

これは私の友人で日系カトリック教徒の安藤さんという、日本人のイコン造形作家の方が作られ、ローマ法王にも買い上げられたものになります。ロシアのイコンの専門家です。彼は非常に清貧な生活をされています。私はそれを助けるためではありませんが、欲しかったので20年前に譲っていただきました。イコンは東欧の国でお土産的に売っています。農民が描いてもよいし、３年ごとに手を加えてもよいし、要するに決めごと（教義）がたくさんあるのでそれを守ればよいと。

これがロシアのイコンが一番盛んだった頃ですが、20世紀に入り近代化とロシア革命との間で、キリスト教が迫害された時代がありました。

ロシアには４つのイコンを作る村があり、苦し紛れにイコンを描いてはいけないといわれています。そのこともあり、今日お持ちしたものはロシアのパレフ村で製作されたものを持って

きました。こちらもお回しますので、どうぞ観て触ってみて下さい。まあ、いわゆる宝石箱です。ロシアに行くとお土産として売られています。この方向に村自体が転換したのです。パレフという村のものなので、ロシアパレフと呼ばれています。６つ村があるのですが、これはテンペラ画です。この技法について書かれた本も持ってきました。ロシア語です。いつかロシアの留学生が来たら訳してもらって下さい。非常に繊細なもので金はオオカミなど肉食獣の牙で磨いて光らせてあります。卵で描いたりします。これは私の大学の授業の卒論です。私がどのようなことを教えているのか読んでみて下さい。

３．美術史の流れについて

次のプリントには年代が書かれてあります。その次に白黒のページがあると思います。それは私の対象としているルネサンス以前のイタリアの作家達です。皆さんがご存じの作家さんは、一人でもいらっしゃいますか。おそらく最初のフィレンツェ派の上から７人目くらいのジョット、チマブーエくらいはどこかで聞いたことがあるのではないでしょうか。私の本ではこの作家に加えて、他のほとんどの作家たちを載せました。私たちが知っているのは、ほんの一握りの作家しかいません。その以前には、膨大ないろいろなんな画家がいたのです。そしてルネサンスに入って、科学の発達と共に大成功したのが、ミケランジェロやレオナルド・ダ・ダヴィンチなのです。

そのミケランジェロやレオナルド・ダ・ダヴィンチを学ぶ上で、それ以前の画家がどのような仕事を残したのを知りたくて、私はこの世界に入りました。

最初のフィレンツェ派のカラー刷りに戻りまして、最初の画家が11世紀から13世紀にかけて、どのような絵を描いてきたかこの後スライドで、聖母マリアを中心にお見せしたいと思います。この時代はまだエタノールが発見されたかどうかの以前でしょうか。消毒薬も当然ない(猛毒のメチルアルコールはありましたが)。そのため病気にかかったときは祈るしかない。何もできない。そのためキリスト教は必要でした。1300年代にキリスト教の布教が許され、一気に広まっていった。神の代わりになる偶像が必要でした。その最初はマリアです。女性中心でした。別名ヴィーナスとも呼んでいました。そしてそこに描かれたのがキリストです。キリストは大人なので、決して赤ん坊に描いてはいけない。大人の顔をしていないといけない。そのため私たちから観ると小さいが、赤子のような大人に見える。それが当たり前なのです。そしてマリアは母なる大地の聖母ですから、美人に描いてはいけないのです。日に焼けて黒い顔、それが本当のマリアだと言われます。それがルネサンスに入るとだんだん美人化してきました。

やがて、遂にマルティン・ルターによる宗教改革が起こる、それが歴史の流れでした。その流れを知っておかなければ、この時代の絵画をうまく理解できないのではないか、おそらくつまらない絵に見えるのではないかと思います。そんな時にいろいろな人たちは工夫をして、ついには写実としてのルネサンスに突入していく訳です。今からその時代の絵の技法の話をしていきたいと思います。

４．書き割り的技法

どんな技法があったのか、そしてその技法で描かれた絵にはどのようなものがあったのか。カラーのプリントがあります。書き割り的技法と書かれています。これは私の師でテンペラ技法研究の先駆者の田口安男先生がよく使われた言葉なので、ここで使いました。舞台背景などの看板的なもので、場面が変わったときにさっと変えなくてはならない、あの背景を描くのを書き割り、そして合体させて１つ大きな枠を作る、その描き方を書き割り的技法と言っていま

した。簡単に言うと塗り絵です。塗り絵の大御所といえば、シュールレアリズムのサルバドール・ダリです。彼は映画の町であるアメリカ・ハリウッドの看板画家だったため、とても速く絵を描くことができた。

ここに２つの絵があります。左がミケランジェロ。彼の途中の描きかけの絵ですが、これを見るとミケランジェロはフレスコ壁画の影響が強かったため、未完成の真っ白の部分があってもいきなり完成なのです。神のミケランジェロと呼ばれた。何故かとこれを観るとわかりますよね。私は予備校時代、石膏デッサンしていたときに目から描き始めた。そうすると佐藤一郎先生が来て「君ね､絵は全体から描くものだよ」と言いました。覚えてらっしゃいますか、佐藤先生。

５．下地について

天才ですこの人（ミケランジェロ）は。この描き方観たら、とても真似はできません。この時代は顔の下地にテールヴェルトを塗っています。テッラは土、ヴェールは緑ですけれど、それを最初に塗った訳です。何故なのかと言いますと、ミケランジェロの先生であるギルランダイオ（銀細工職人の家系に生まれ、１時代前のフィレンツェ派に属す画家）という人が、下地に緑を塗る方法をシエナ派に則っていたためだからです。それを忠実にミケランジェロは学んだということです。ルネサンス当時は褐色の下地が大体普通でした。レオナルド・ダ・ヴィンチも最初は褐色です。褐色と言っても幅が広いのですが、ローマンレッドやライトレッド、ベネチアンレッドといった明るい褐色が使われています。日本の場合、有田焼で使われる釉薬のベンガラをずっと乳鉢ですっていると、大体ピンク色になってくるのと同じです。

当時、褐色がスタンダードだった時代にミケランジェロは一時代前の緑を塗った。緑を塗るといってもいろいろな意味があります。緑は中間色でグレーにも見えます。

明暗を使い分ける場合には、緑を塗っておくとわかりやすい。あまり失敗がないと同時に、緑の土は丈夫であり、長持ちをする。イタリアやスペインを旅行していると断崖に緑が見えます。あれはちょっと日本人が観るとびっくりします｡自然に大量に採れる土でもあった訳です。また黒く見える部分は紺色です。マリアは紺色のマントを着ます。清純な愛の意味です。その下には情熱の愛であるルビー色の赤を着なければならない、と大体教義は決まっています。

６．テンペラ絵の具の原理

右の絵はピントリッキオの壁画です。これはまさに書き割り的です。完全に白いところには何も塗っていない。このような一日の仕事を何というか工藤先生はご存知でしょう。ジョルナータ法、ジョルナータ、壁画を描くときに使われる技法です｡一日の最初に湿った漆喰を塗り、その漆喰が乾く前に顔料を染みこませるという方法です。一日分の描く方法をジョルナータといいます。ですから、白いところは何も描いておらず、次の日に描き完成なのです。

レオナルド・ダ・ヴィンチが最後の晩餐を描く時に、この壁画法が嫌で精緻に描きたいのでテンペラ絵の具で描いた。そのことによる要因で、漆喰が強アルカリ質のため、上から描いたテンペラ絵の具が剥落した。テンペラ画とブォ

ン・フレスコ画の組み合わせ、フレスコ・セッコでしょうか、メッツォ・フレスコ技法らしいです。本来は湿った漆喰を塗るフレスコ技法をブォン・フレスコと呼びます。レオナルド・ダ・ヴィンチは、乾いた壁にシルバーホワイトの下地を塗って、その上からテンペラ絵の具で描いた。それをメッツォ・フレスコ画といいます。

テンペラ画の媒材は、卵の黄身に少しの乾性油を加えたもの、詳しく言うと油と水が混ざったものです。乾くと水分が揮発し、油分が固まることで絵の具が非水溶性となる。その水と油が分散したものを何というか。これはエマルジョンといいます。現在、皆さんの周りにはたくさんのエマルジョンがあります。例えば、牛乳やマヨネーズなどです。乾いてしまうと水には溶けない、これがテンペラ絵の具なのです。もっと簡単に言うと、描いている時は水で筆が洗えるが、乾いてしまうと水で筆が洗えなくなってしまう性質です。現代の耐水性ペイントやアクリル絵の具もテンペラの一種であると思ってください。

初期の画家はほとんどテンペラ画技法で描いていました。皆さんが知っているレオナルド・ダ・ヴィンチのモナリザも最初はテンペラ絵の具で描いた。これは私の書籍から得た知識ですので、実際に分析して調査された訳ではありませんが。それから徐々にクルミ油を卵に加えていった。テンペラ絵の具は水性ですので、乾くと指や筆でぼかしたりすることが難しいのです。一方、油絵の具で描いていくとじわっと薄く引き延ばせて、レオナルド・ダ・ヴィンチのように柔らかい肌が描ける。だから油絵の具が世に出てくる。だんだん油絵の具に移行してくる。テンペラ画は艶がないので、最後にワニスを塗って艶を出さなければいけない。油絵の具は最初から艶がある程度ある。メリット、デメリット両方があった。

実は私の専門はワニスなのですが、今度500ページの本を出版します。ヴァイオリンと絵画について書いた、ワニス大系ともいうべき本なのですが、古い時代の古典的なものに限って書きました。それは私のテンペラ研究の仕事の最後の仕上げとしてのライフワークです。

７．板絵テンペラ画の装飾見本

実際にどのような技法があったのかに移ります。№４です右下横に２ページと書いてあります。金箔の技法のミッショーネ技法です。これは描かれた絵の上に金箔を貼る技法です。ここに絵が横に並んでいますので回します。これはドゥッチョという画家の作品の一部分です。石膏下地の上に顔料を練り込んでレリーフにしています。盛り上がっています。1980年38年前のものです。こちらから回しますのはカンピョーネといい、部分模写です。過去の絵のいいとこ取りしていろんな技法を試したものです。これは誰のどこの部分、これは誰の部分と。この中でミッショーネと呼ぶ技法を模写した部分があります。

この細かい金の線を細く貼っている箇所もそうです。描いた上に細かい金箔を貼る。それは日本の載金細工（きりがね）という、仏画に描いてある細い線とは違って、西洋のものは立体的である。盛り上がっていることが大きな違いです。そして、その下のグラフィート技法、金の上に絵の具を乗せ、引っ掻いてその下の金泊を出す技法です。出たところに刻印、点を打って加工していこうとするものです。その右の№９番は、金箔を貼って先の丸いもので引っ掻くと、下の石膏地がまだ柔らかいのでへこんでくれる。先に赤い砥の粉を塗っていますが、金箔を貼ると赤い砥の粉が消えますがその上に線刻をし、その上を1000番から2000番の耐水ペーパーで磨くと金箔がとれ､赤色が出る。右10番は、その上に白色を乗っけるなどして細工をしていく。これに銀箔などを加味させていくと非常に複雑な技法として発展していく。

スライドを観るよりも、私は実物を触らないと気が済まない。金箔を貼った上に打つ13番の刻印は革細工に使うもので、自分で作ったりする。釘の先を丸めたりして、加工して作る。下の石膏地が１ミリほどあるので、柔軟性があれため切れずに凹んでくれます。これはマリアの後光です。（11番）刻印の見本です。金箔を貼ってから瑪瑙、またはオオカミの牙などで磨いて光らせる。

これを作ったのが2006年なので十数年たって

います。

それでもこのように輝きを残している。これにニスを塗るともっと丈夫になります。たとえば皆さんが知っている楽器のハープにはニスが塗っています。楽器は手で触るので保護のためです。

その下はマーブリングによる大理石模様です。工藤先生はイタリアへよく行かれると思いますが、イタリアはどこも大理石だらけです。すべて石です。驚くし、生活感覚が狂ってしまいます。日本人が独特の島国の人だと認識される。絵の中にマーブリング模様が使われています。私も実習の時に学生から、白いところは何を描いたらいいかを聞かれるとマーブリングと答えます。すぐできてしますから楽です。やり方は14番で、３つの色を用意します。白い色を黒い皿に出す。薄く白を溶いている状態です。これを全体にたっぷりと塗っておいて、下の３つの色を細い筆でさっと描いていく。これがその３種類です。配布資料参照、一番右がテールヴェルトだけで作ったもの。

大理石を観ながら描くとよいです。そこの絵にも描かれています。

私が不思議だと思うことは、ピエロ･デッラ･フランチェスカのアレッツォにある壁画で、大きな大理石模様が壁に描かれている。どうやって描いたのだろう。おそらくヨーロッパの人たちは体の中に大理石模様が染みこんでいるのだと考えます。私たちが描けなくても向こうの方々は、鼻歌交じりに描いているのではないかなどと考えています。例えば、グラナダのアルハンブラ宮殿のいろいろな模様を観ても、私たち日本人にはない感覚だと思います。アラベスク模様で装飾されています。

８．褐色下地について

これはピントリッキオという画家の絵です。最初の方にピントリッキオが描いた壁画の絵というものがありましたが、このテーマは、当時の絵は暗い色から段々明るく、つまり暗から徐々に明にしていきました。現代の我々は、白いキャンバスを暗くしていくことに慣れ親しんでいますが、実は昔は暗い色から明るくしていくことが一般的でした。この絵を観ると最初に背景を暗いローアンバー、褐色が全体に塗られています。右や左、湖の背景、褐色のところに少しの白の横線で湖が描かれています。ヨーロッパへ行って驚くことは、私たち日本人において近目で観ていいと思う絵は、遠目で観るとあまり立体的ではない。ヨーロッパでは遠目で観てよい絵は､近くで見ると意外と雑に見えます。いかにレアリズムという言葉の意味が、私たちと違うのかと痛切にこの絵から感じます。近くで見ると何のことはない、暗い褐色の上に段々白く塗っている。

右の背景の緑も徐々に明るい緑を塗っている。そういった描き方です。

レオナルド・ダ・ヴィンチの先生のヴェロッキオとか兄弟子のペルジーノなど、皆同じ描き方をしています。この背景の描き方を最終的に完成した人はペルジーノの弟子のラファエロです。実に美しくなってしまった。まあ、これが当時のテンペラ画の描き方です。そしてこれ以上滑らかにするには、油絵の具を使うしかありません。何故、油絵の具が必要になったのかということがわかるのではないかと思います。

その次のページ。19番左上が全体像です。ブレラ美術館にある「荘厳の聖母」です。さきほどの話に出てきたピエロ・デッラ・フランチェスカの絵です。この絵の左から五番目の人物の絵です。この部分を拡大したのが20番です。髪の毛の部分を拡大したのが21番です。これを観るとこの下の色に何が見えますか。下の暗色の上に、明るい色を乗せて段々明るくしている。最後に一番白いところをちょっと描いて、はい完成。

私たちは美術学校の入学試験で、なんとなくぐちゃぐちゃに描いてリアルにしていくことに慣れていますけれども、向こうの上手な人には描き方があったわけです。描き終わった、はい完成なのです。追求するのではなく、塗り終わると完成になる。この感覚はすごいと考えています。この感覚がどこから来たのかというと後から話します。22番褐色の上にローアンバーをおいて、その上にナポリイエローなんかをちょんちょんとおいて、はい完成。これを遠くで見ると素晴らしい立体感に見える。この絵はだまし絵的な発想が伝統的にあったのだと思います。遠くから観るとだまし絵です。大体は、絵空事といいますよね。ですから、絵画っていうのはだまし絵かもしれない。次のページ。私がバーゼルで観てきた絵です。この透明なガラスの描き方わかりますか？変にこねくり回していないですよね。ちょっと白を乗せて透明な感じに写っている。右のレモンはかなりグレージングしたり、薄く色をかけたりホワイトを入れたりして、立体を生っぽくガラスの質感と違ったものに見せようとしている。

９．カルロ・クリヴェッリ

さてその下､ここからテンペラ画家の御三家、私たちにとって御三家です。ヨーロッパの画家はたくさんいますから、私たちはそれらの資料をリュック背負って見に行きます。ペルージャ国立絵画館の下に酒屋があります。そこでこの絵を知らないかと聞きました。するとおじいさんが出てきて、美術館の話聞いたことあるぞと言います。実はこの酒屋の上は国立絵画館になっているのに知らないのです｡何故かというと、日本人のような古いものに対する趣味があまりない。私たちツーリストはよく調べて行きますから。

これはマグダラのマリアで、御三家の一人のカルロ・クリヴェッリの絵です。マグダラというのは、新約聖書で娼婦がキリストに懺悔して改心したと言われています。実は最近の研究では、キリストの恋人で後に奥さんだったということがわかって、ローマのバチカンもそれを認め、1970年に聖書を塗り替えました。旧約聖書に出ていたのに新約聖書がもみ消していた。これがマグダラのマリアです。右に持っている壺は油が入っている壺です。この油をひざまずいてキリストの足に塗り、接吻をしながらキリストにあなたは幸せになれると言った。この洋服のヒダの描き方、これも何か日本人離れした、そういった世界です。アップが26番の絵です。ここにいろいろなレリーフ、盛り上げを施しています。肩や背景にレリーフ（盛り上げ）が観られます。

このクリヴェッリという画家はとても性格の悪い人だったみたいです。おそらく友達にはなりたくないタイプ、飲んだら最初に酔っ払うしお金も払わないタイプ、よくいますよね。ここに描いた宝石群の中に本物の宝石が一つ付けてある、どれが本物か当てさせる。俺が描いたものとどちらが本物か当ててみろ、ということです。性格が悪い、そんな人だったのです。人妻を犯して島に流されたり、弟子は誰もいなかったり。それでも今は御三家になっている。

その次のプリントこれもクリヴェッリの作品でカメリーノです。ミラノに５回も観に行っています。観て下さい、真ん中の鍵。聖ペテロの天国への鍵です。こんな風に描いたら、佐藤一郎先生に怒られてしまいます。絵は立体をぶら下げてはいけません、なんて言われます。クリヴェッリの絵は世界中にばらまかれました。ナポレオン以降の時代です。2009年にブレラ美術館で全クリヴェッリ展がありましたよね。私は残念ながら行けませんでしたが。

10. 画工と画家

その下の絵30番、先ほどお話しした鼻歌交じりに塗ったという絵です。これは装飾的分割という風になっています。言葉は少し難しいですが当時の技法を書き残しているチェンニーノ・チェンニーニが書いた言葉です。

この中に当時の職人達がどのようにして仕事をしていたのか、図版が入っています。

さて、これが最後の説明になるでしょう。ヨーロッパの壁紙です。壁紙の模様です。ちょっとハレンチな壁紙です。このアップが31番。この白い花に目をやってみると、これが分割なの

です。最初に一番明度の暗いピンクを塗る、花の芯のところです。それを№1とマークする。その色を残しておいて、スプーンで別の皿に取って、№2と次の色はその色にちょっと白を足す。そのように繰り返していくと10段階くらい色ができる。色相は変わらない同じ赤色。明度が変わるだけ。

当時の工房の親方は社長業です。親方はデッサンするだけです。そして番号をふっておく。次にお弟子さんが、せっせとふられた番号を塗る。するとできあがり完成。お弟子さんは追求するような頭がない。先生は直すことができるが、お弟子さんは直してはいけない。これが画工のお仕事なのです。当時の工房はボッテーガといいます。イタリア語です。フランス語でブティックと呼びますけれども。芸術という言葉はありませんから絵師です。絵師は職業の上下で言いますとアルテメカニカ（機械職人）、つまりレベルが低いのです。アルテリベラル（自由職人）というのが高い、要するに医者や、数学者、詩人です。絵描きや彫刻家は下だった。機械的職業だったと言うことです。

しかし、ルネサンスに入りまして、レオナルド・ダ・ヴィンチなどの天才が生まれてきますと少し地位が上がる。しかしながら彫刻家のミケランジェロは、もともと石屋なので地位が低いのです。絵具を地位の高い薬屋で買うレオナルド・ダ・ヴィンチが憎くてしょうがないのです。そんな時代の中で、ラファエロやレオナルド・ダ・ヴィンチなど絵描きが地位をあげ、その後バロックに入って宗教的でなく個人的な絵がカラヴァッジョによって描かれるようになりました。やっと絵が個人的な表現になっていきます。それまでは全部、様式が決まった中で絵描きが描いていたわけです。

これが大体のテンペラ画とその時代の話です。画像を見てちょうど終わりになりそうですね。パレフの技法書はオオカミの牙で金箔を磨いていますが、金箔を貼る方法はロシア語で書かれていますから私には読めません。

11. 麒麟血

麒麟の血です。大きなドラゴンの木（ドラセナ・ドラコ）に傷を入れると樹脂が流れてきます。真っ赤な樹脂が。私のニスの研究では、ストラディヴァリウスの最初に塗った赤は、麒麟血を使ったとも言われています。これを観た私の学生が、先生、これはキリンの糞ですかといいました。これは布で絞っているからこのような形になっているんです。これを砕いて粉にしてアルコールで溶かしたものが真っ赤な液体になる。それをヴァイオリンに最初に塗ったのが麒麟血。今では貴重です。オレンジっぽいものと真紅ものがあります。

12. キリストとマリア

画像を見始めます。これが最初にお話ししたように初期のマリア像です。どうですか、キリストが大人でしょう。これはまだ顔がマリアっぽい。これもそうですね。画家にまだ名前がありませんが、私は芸大時代からずっと絵を描いてきて、ルネサンスの美しい調和の美に憧れてきました。調和することが美しいのだと。明治時代にルネサンスの美が紹介されています。しかし、大学三年の頃ふと思って、私の思っている美は、本当に美なのであろうかと。

西洋美術史を紐解いていくと、どうも不調和の美というものがあるのだということに気がつきます。バロックですね。どうも西洋の方では、不調和の美の方が美しいと感じている人が多いのです。

明治時代ラブを愛と訳したようで、愛と言われたらその気になってしまいます。実態は何もないのですが、芸術という言葉もそうです。当時の哲学者西周が訳しました。それと同じで、言葉は明治時代に入ってから意訳され言語化していったのです。

では美というのは何だろうと観てみると、実は私はこの時代が一番美ではないかと。要するに心で描いているのではないかと。おそらく3.11に遭遇していない人が、現場の絵を描いても心が入っていないのだと思います。もっと言うと、ブルースは黒人が悲しみをミシシッピで歌ったものがブルースです。そのブルースを日本人の我々がブルースだと歌っても本当のブルースかな、と思ってしまう。

このようにマリアというのも違うぞと、簡単に美しく美人に描いてもいいのかと、そういう視点で観ていくととても面白い。本職が画家でない人が描いている。これは初期のキリストです。正面を向いて直立不動です。目が正面を向いている。東京神田にあるニコライ堂の神父さんに聞いてみたら、キリストは信者全員を観なければいけないからだ。目をぱっと開いて、全員を観ていないとだめだと言っていました。ここに個人感情が入ってはいけないのだと。これはイコンと同じですね。

この次、さあ、この顔ですね。以前、スペインの何処かでキリストを変な顔に修復してしまったということで、ネットに載っているのを観たことがある人いませんか。あれはあれで正しいのですよ。私たちは美しいという観点で見て、あれが美しくないからへたくそだと思っているのかもしれません。本人は信仰の元に描いた。そういった日本人の既成概念と、かなりずれている面があるので当時の絵を見る場合には、その時代の感覚、社会学を観なければいけない。

次、これは少し時代が新しくなった。リアルになっていたのです。これは13世紀です。腰がくねって動きが出てきている。

13. 聖フランチェスコ

次ここからルネサンスが始まります。ジョットです。

ジョットが陰影を付けて、人間のような肉体的な筋肉を描いて、これを観た皆がすごいと思った。レオナルド・ダ・ヴィンチもジョットにはかなわないと言っていたらしい。

その次、これは最初の頃の修道僧、聖フランチェスコです。イタリアのスーパースターです。イタリアでこの人の悪口を言ったら大変ですよ。彼が小鳥と話して説教をしている場面を描いた絵ですね。聖フランチェスコの映画や絵画は、何十本も出ていますのでここでは割愛します。本当に小鳥と話せたのかというと、先ほど亡くなったイギリスの天才物理学者ホーキング博士いわく、宇宙は広く私たちの周りにはベビーユニバーシティーと呼ぶブラックホールがたくさんあり、その中に入ってしまえば小鳥とも話せると、あくまで宇宙レベルの話です。宇宙から観ると地球は宇宙の田舎の田舎だから、このようなことがあってもおかしくないとホーキング博士は本で述べています。ですので、小鳥と話せたという聖フランチェスコの話、これも笑って過ごせるものかなと。当時の人が黒死病になったら拝むしかない。祈るしかない。その切実たる思いというものは、すごかったのではないかなと考えます。

さっきのブルースの話と同じですね。私たちにはわからない。

14. フラ・アンジェリコ

次はミニアチュールで楽譜の一部です。この絵の作者だったのがフラ・アンジェリコ、皆さんに学生の書いた卒論を回していると思います。彼はお坊さんで教会でいつもこれを描いていた。あまりにも上手いので、お前はアーティストになりなさいと。そして本当にデビューしてしまったのです。

ここで見せたいのは、ここのブルー、段々とグラデーションになっていっているのです。さっき言ったような、１つの色に段々と白を足していくというものです。番号を振ってあるので誰でも塗れるわけです。塗り絵ですから。楽しいです。皆さんもやりましたよね、できたらすごいなと。その技法が絵画の最初の描き方の１つだったのです。次のこれもそうですね。青いところに段々に金で明るくして絵を描いています。次のこれだとわかりやすいですねグラデーション青ですね。青は一番金と響き合います、補色ですから。

次は東大寺です。これはシルクロードから入ってきたという説があるんですが、調べていま

せん。大体同じ時代です。東大寺の繧繝模様（うんげん）というものです。沢山あるんです。こういうものが。そして単色よりも分割していった方が、立体的になるのではないかということを学んだのか、本能的に知ったのかわかりません。おそらく今後誰かが研究してくれるでしょう。

15. シモーネ・マルティーニ

次は先ほどの御三家の一人、シモーネ・マルティーニの受胎告知です。シエナ派の巨匠で、亡くなったのが1430年頃です。レオナルド･ダ･ヴィンチが生まれたのが、1452年ですのでその20年くらい前に亡くなった画家です。受胎告知は絶対に教会にないと困るものです。それぞれの画家ところに注文がいくのです。図柄は決まっていて、下は大理石模様、金、天使ガブリエル、そしてお告げの言葉は立体で表す。マリアが体をよじる、あれは「はずかしや」という場面です。工房の親方がお坊さんを接待し、作品の注文をもらってくることです。そして工房に戻ると、弟子達が親方の言われたとおりに仕事をしなければならない。

工房では何でもやっていて、絵画のみならず立体や金属細工までも手がけています。レオナルド・ダ・ヴィンチは、王様のためのお祭りイヴェントの用意までしている。シモーネの受胎告知の絵、これは全体部分で額縁部分は工房の中で専任の額縁屋さんがいます。この左右のパネルは弟子が描いたそうです。３分の２サイズの精巧な模写が金沢にあります。

次はクリヴェッリ、その次は最もイタリア・ゴシック的なロレンツォ・モナコです。同じ受胎告知で、この流れるような線は人物像のデッサンの正確さを無視しています。完全に抽象的に描いています。イタリア的な線だと。天使が上で空を飛んでいる。「天使の遠近法」を研究された美術史家の辻茂さんが、私たちの知っている遠近法とは違うものだと指摘しています。空から観ている遠近法だそうで、だから天使の遠近法だと。下に描かれているタイルの模様がどうも今の遠近法とは違う、それは空から観ているからです。実際に空を飛んでいる天使ガブリエルがいます。

次のこれは､最後あたりになる受胎告知です。皆さんもよく知っている、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いたものです。やはり青の下に赤の衣装を着なければいけない｡ルビーの情熱の愛、そしてサファイアの慈悲の愛です。

16. 受胎告知

次は御三家最後の一人、フラ・アンジェリコです。

ミッショーネ技法については、先ほどの見本に一部あったと思います。お坊さんとして制作しているうちに上手くなり、やがて画家として独立した人です。アンジェリコは「天使のような」という意味で、本名は別にあります。涙を流しながら絵を描いたと言われています。

トスカーナ地方のコルトーナはバスもタクシーもなく、私が訪ねた当時はテレントルで降りて行きました。

イタリアのミシュランガイドが一番よく、私はいつも持ち歩いていました。このガイドブックには。イタリア国内の美術館の開閉時間が全部載っています。コルトーナの町の下にあるドーモにも、ルカ・シニョレッリが描いた作品があります。大司教ゆかりの教会は、ムゼオ・ディオチェザーノなので行ってみようと思いましたが、コルトーナ・チェントラーレ駅で降りないと、コルトーナ駅はバスも電車もないと言うのでチェントラーレ駅で降りました。自分でバスに乗って、イタリアのトスカーナの山を目指して行くしかない。民家の屋根はイタリアのオーカー系の有名な屋根瓦で、この赤っぽい色を地塗りに使ったのです。後にレオナルド・ダ・ヴィンチもこの色を下塗りに使用しています。

これはコルトーナの町のヤガルで、コルトーナの町のお祭りですね｡これはここ出身の画家、ルカ・シニョレッリとペルジーノの絵です。コンビニも何もないのでトレーラーで何でも売りに来るのです。豚の丸焼きがありますが、この人じゃないですよ。これを崩しぐちゃぐちゃにしてパンに挟んで食べる。中の味はちょうど煮込みと同じ味です。これはチーズの発祥の地ですね。

ここが司教区美術館らしいということで、入っていくとずっと降りていく地下室がある。そこにはテーブルがあって芳名帳がありました。めくると５年前に一人だけ日本人が来たとありました。ここにはフラ・アンジェリコのこの絵があります。受胎告知です。天使ガブリエルがお告げに来ている。この絵の一番驚くべきは、どこも痛んでいないところです。昨日描いたように鮮やかで腰を抜かします。ショッキングピンク色をしています。丸一日つぶしても来てよかったと思えるものでした。

私は何人かの学生に紹介したところ、涙を流しながらお土産持ってきました。本当に美しい絵です。50号よりもっと大きいでしょうか。足下を観て下さい。

ボッティチェッリの春（プリマヴェーラ）にも花が咲いていますが、近くで見ると落雁のように盛り上がっています。すでにこれも盛り上がっています。

同じフラ・アンジェリコ作の受胎告知が、マドリードのプラド美術館にあります。私はその次の日、ローマからプラト美術館に行って両方見比べてきました。違いはブルーとして使われている、ラピスラズリの量が違います。おそらくプラト美術館の注文主の方が、お金があったようです。当時ラピスラズリと金の材料費だけは別途注文ができます。こんなに青く素晴らしい色はなかったので、相当のお金を払っていると考えられます。アダムとイヴの楽園追放が大きく描かれていますが､注文主の意向でしょう。鳩が飛んでいてお告げに来るなど、全部注文主の意向です。発注の話が折り合わないと、こんな感じでいかがでしょうかと、途中経過を持って見せて、注文主の意向を伺います。例えばここを変更してほしいとか。（注文主の言うことを聞かなかったことで有名なのは､レオナルド･ダ・ヴィンチです。自信があったのでしょう。）プラド美術館の受胎告知とコルトーナのそれとを比べてどちらがいいか。プラドの方、これは美術館に飾られているので傷んでいます。観るとわかります。前日に新品のようなコルトーナの受胎告知を観ているので。是非コルトーナへ行って、当時の輝きのあるものを観て下さい。

17. 会場での質疑応答

Ｑ：テンペラを指導されるときに、層の構造的に、３段、４段と薄い層で重ねて終わりなのか、それを更にもう一回やり直すのかというのは、さっきのイタリアの話だと塗っておしまいみたいな感じだったが。

Ａ：（紀井氏）さきほど大きなピントリッキオの図版をお見せしたのですが、時代とともに画家の立体的に描きたいという欲望から、徐々にホワイトを加えていくわけです。基本的に光が当たっている部分は、白が加わって立体的になる。陰の部分は意外と透明で、薄い層を重ねていくというように、最初は基本的にそんな発想を持っていいのではと思います。表現を追求していくと、最後そこには立体的に描きたいという画家の要求があったと思います。